

秋の彼岸によせて

平成二十九年九月 大乘寺 長老 岡 光俊

今年も日に日に日暮れが早くなって参りました。

実りの秋と共に、ご先祖様方私たちが佛様の教えを聴かせて頂き、迷い多い此の岸より、心穏やかに、また清々しい日々が頂けるよう、彼の岸を目指す彼岸が参りました。

この拙文もここ数回は、普段皆様が墓参りの時に何気なく用いておられる櫛・櫛・塔婆・ロウソクのお話しをさせて頂きましたが、今回は、線香についてお伝えさせて頂きたく思います。

経文に「八千億の佛に供養し奉事して衆華・瓔珞・塗香・抹香・焼香を供養せん」と説かれているように花や美しい飾り物と共に香りも供物とされていた事が分かります。

またお経を毎日読むことにより身体が清まり、口からは青蓮華の清らかな香りがいざると次の様に説かれています。

「教えを受けて往いて世世に口の愚なく 口の気臭穢なくして
優鉢華の香 常に其の口より出でん」

また経文にはそれ以上に、地中に埋もれている金銀まで香りで見ると説かれています。此は弘法大師様が四国を回られた時に多くの奇跡を表されたと伝えられておりますが、御大師様が佛様であった事、また伝説が実話であった事も窺えます。

「地中の衆の伏蔵 金銀 諸の珍宝銅器の盛れる所 香を聞いで 悉く能く知らん」と。

また経文には良き香りとして、須曼那華香・闍題華香・末利華香・膽蔔華香・波羅羅華香・赤蓮華香・青蓮華香・白蓮華香・華樹香・果樹香・栴檀香・沈水香・多摩羅跋香・多伽羅香、および千萬種の和香、もしくは抹せる、もしくは丸せる、もしくは塗香」と現存する香りの総てが説かれています。

また香りは「妙法堂の上にあつて、刀利の諸天の為に説法する時の香」と説かれていますように、修行にそつて香りも変わり、「梵天に至り 上有頂に至る諸天の身の香、また皆これをかぎ、ならびに諸天の焼く所の香をかかん。および菩薩の香・諸仏の身の香」と説かれていますように、香りそのものが佛様そのものを現しているのです。

これらの香りを線状に加工した物が線香で発祥は古代インドと言われています。

秋の彼岸、虫の音に耳を傾け、朗月を眺め、香をたき、経文を手にご先祖様と共に浄まり、佛様の香りを体験されますよう。

きっと何かが変わって参ります。